カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムＳＥＥＤで暴れるよ～！

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムＳＥＥＤで暴れるよ～！

【Ｎコード】
Ｎ３０７８Ｚ

【作者名】
メア

【あらすじ】
アンラ・マンユ暇潰しの為に殺された人々の意識が集合体となってガンダムＳＥＥＤの世界にチート貰って転生させられた。
転生させられた先は、ユージン・ヒビキが生き残ったところ……
…つまり、キラとカガリの妹なんだ。
そして、ルナティックコーディネイターに改造されたので、世界を

滅ぼしたら、リコールくらいました。

ヒロインはステラ、ルリ

世界の破壊

何処にあるのかも分からない空間に一人の声がする。

ここはどこ、ぼくはだれ？

「ここは死後の世界、お前は死者達の集合体」

死後の世界？　学校がいいな？　集合体って事は寄せ集めか～～だから記憶がないのか。

「あれは幻想。そしてなぜに疑問形？」

なんとなく～～？　それで、天国？　地獄？　なんで死んだの？

「支離滅裂だな。まぁ、我の暇潰しの為だけに殺したのだし、天国でも地獄でもないな」

そっか～～ならいいや～～

「あっさりしているな」

ゴスロリ幼女に殺されるならほんぼうだから？

「ヒデオの変わりの暇潰し要員には良さそうだ」

褒められた！　やったね？

「さて、いい加減本題に入るが、貴方達には転生してもらうの」
チートもらえるならいいよ？

「くれてやるチートは五つだ。何がいい？」

何でもいいの～～？

「うむ。このアンラ・マンユに不可能は無い」

なら、努力すれば何でもできる才能上限無しと知っていれば何でも召喚できる召喚魔法、召喚した対象を服従させられる能力～～？
あっ、もちろん全て説明書つきでね。

「どれもアホな力じゃな。他の二つはどうする？」

後はいらないや～～

「なら、こっちで適当に改造しておく。精々我を楽しませろ」

アイアイサー！

新たな生命が産声を上げた。

「あなた、可愛らしい女の子よ」

「うむ、この子はいい子に育つだろう」

幸せな家庭だね！

でも、実際は……こっち。

「あなた、何をするの！？」

「ふはははは、私は実験に成功しスーパーコーディネイターを作り上げた！　故に、私はスーパーを超えるウルトラ……いな！　ウルトラを超えるルナティックコーディネイターを作りあげる！」

わぁ～マッドさんだ～～！

「やめてぇっ！」

「うるさい、邪魔だ！」

銃声が聞こえて、母親らしき物が出来上がった。

「もはやブルーコスモスにも邪魔させぬ！　ふはははははははは！」

それから、培養槽に入れられて身体中をいじくられました。身体の中はぐちゃぐちゃ、脳は量子コンピュータが取り付けられたり、苦痛やなんやらで精神が壊れかけた。

一年が立って、動けるようになったので、血文字で召喚陣を書いて召喚を行った。

「来たれアンラ・マンユ！」

世界に穴が開き、中から闇そのものがはい出て来た。

「何よ、いきなり呼んで……」

「世界を滅ぼして」

「ふざけ……あれ？」

アンラは命令に従い、世界は闇に飲まれ無に帰した。

終わり。

「てっ、終わらないわよ！」

あはははは！

「で、なんでこんなことしたのよ？」

あんな世界壊れていいよ！というか、女の子だったし！

「まぁ、ランダムとはいえ、あの狂気科学者凄いわね。実際、ウルトラなら成功してたかも」

で、どうすんの？

「私は結構満足したけど、暇潰しにはなってないのよね。リコールよ。能力に神の召喚、従わせるのは禁止して、弱体化の変わりになんか付けとくわね」

了解、行ってきます～～！

アーニャたんの魔改造

Ｓｉｄｅ　アーニャ

私が召喚された時は、ブリタニア皇帝ルルーシュ君との最終決戦で、オレンジの人に殺されそうになった時、ここに連れて来られた。

「うん……記憶、戻ってる……嬉しい……」

あの人が私の身体を好き勝手に使ってたんだ。それは許せないけど、それより皆が気になる。

「……でも……今の私は……マスターに従うだけ……」

記憶の御礼もあるから、今は私の全力でマスターをサポートする。

「……それにしても、面白い……」

地下はドックや研究所などの施設、地上は、ブリタニアの宮殿のような施設と遥か太古に滅んだ恐竜が沢山いる。

「……記録……」

「グルルルゥ！」

記録を録りながら歩いていると、大きな口を開けながら迫って来る

ティラノザウルスに携帯を向けて写真撮った。

「って、何してるの！」

「がふっ！？」

私の目の前で大きく口を開けて、私を食べようとしていたティラノザウルスの頭にマスターのキックが入り、ティラノザウルスは吹き飛んで行きました。

「……何って……記録……？」

「……もういい……地上には勝手に出ないでね。猟犬がわりにホムンクルス放ってるから」

「……わかった……」

……凄く残念……無念。

「そんなに残念がらなくても……まぁ、時間が空いたら一緒に散歩しようか」

「うん」

なら、いい。

「さて、アーニャ、次は君の番だから行こう」

「？」

分からないので小首を傾げてみたけど、連れて行かれた。

連れて行かれた場所は研究室。

「そこに裸になって寝て。検診とか色々するから」

「分かった」

言われた通り裸になってベットに寝た。

「っ」

注射を打たれて、点滴を入れられた。

「それじゃ、お休み……」

私は意識がだんだんと無くなって来た。

次に目覚めた時、私は培養槽の中にいた。

「……ん……」

「起きた？　気分はどう？」

「頭が痛い」

脳裏に色々と分からない言葉が浮かんで来る。

「アーニャには、Ｉブレインとマシンチャイルド＋Ｉブレインにゼロシステムを組み込んでおいたよ」

「？」

Ｉブレインはこの脳裏にあるパソコン？
ゼロシステムとかマシンチャイルドって何？

「マシンチャイルドはＩＦＳとの親和性を高めた存在だよ。ＩＦＳは人間の思考をコンピュータに入力できるインターフェースで主にパイロットの機体操縦に用いられる。操縦者のイメージのみで操作する事が出来、煩雑な操作を簡略化する事を可能とした代物だよ。ＩＦＳは体内にナノマシンを注入し、補助脳を形成しこれによってイメージを機体へ伝える。　このナノマシン注入には不快感を伴い、またナノマシン処理中は精神が不安定になりやすく、場合によっては幻覚（幻聴）を伴うこともあるらしいけど、そっちは改良しておいた。脳にあるＩブレイン……生体コンピュータがアーニャのイメージ通りに身体や機体を動かせてくれるよ」

「なるほど……ゼロシステムはまた別？」

「ゼロシステム　（Ｚ．Ｅ．Ｒ．Ｏ．Ｓｙｓｔｅｍ）、正式名称「Ｚｏｎｉｎｇ　ａｎｄ　Ｅｍｏｔｉｏｎａｌ　Ｒａｎｇｅ　Ｏｍｉｔｔｅｄ　Ｓｙｓｔｅｍ」（直訳すると「領域化及び情動域欠落化装置」）　とは、分析・予測した状況の推移に応じた対処法の選択や結末を搭乗者の脳に直接伝達するシステムで、端的に言うと、勝

利するために取るべき行動をあらかじめパイロットに見せる機構だよ。
これは、コクピット内の高性能フィードバック機器によって脳内の各生体作用をスキャン後、神経伝達物質の分泌量をコントロールすることで、急加速・急旋回時の衝撃や加重などの刺激情報の伝達を緩和、あるいは欺瞞し、通常は活動できない環境下での機体制御を可能とする。更に外部カメラ、センサーによって得た情報を、パイロット自身の視聴覚情報として伝達することも可能である。このため、通常のモニター機器は補助的なものでしかなく、基本的にコンソール中央部の球状レーダーおよび周囲壁面に表示されるエネミーマーカーのみで戦闘行為を行う。
まぁ、本来機体につけるものをＩブレインに投入したんだ。だから、機体を自分の肉体に置き換えたり、その逆もできる。簡単に言うとＩＦＳ、Ｉブレイン、ゼロシステムの組み合わせで、ほぼノータイムで自身のやりたいように機体を動かして、未来予測で確実な殲滅を可能とする」

「一騎当千？」

「多分」

「問題は、ゼロシステムに踊らせられない事、最優先はアーニャの生存でいいからね」

「了解」

とりあえず、色々便利になったと思えばいい。

「あっ、写真とかＩブレインで撮れる？」

「もちろん撮れるよ」

「嬉しい……」

早速、写真などの記録をＩブレインに移した。

それから、鈍った身体のリハビリを行った。その次に、格納庫に行き、大きくなった私の愛機モルドレッドを見た。

「胴部にグラビティーブラスト発射装置、ハドロン砲はくっつけ無くても威力は出るし、拡散タイプの追加と威力の増強、遠隔操作装置などに加え、腰にビームライフルも取り付けといたから、シュミレーターで訓練しておいてね」

「分かった。マスターはどうする？」

「私はホムンクルスの実験だよ！　人が欲しいからね」

「頑張って」

「アーニャもね！」

去って行ったマスターを見送り、私はシュミレーターに入った。

「ゼロシステム、ＩＦＳ起動……ミッション開始……」

それから、５時間ほど訓練して、ようやく扱えるようになった。ボソンジャンプはまだ怖いけど、そのうち克服する。

ＳｉｄｅＯｕｔ

アーニャちゃん可愛いよ。あの無表情がいいね。

「さすが最年少でラウンズに入っただけはあるね。もう、モルドレッドを扱い出してる」

こっちの作業も出来たし、ホムンクルス……自動人形でも動かせるかな。

「うん、問題無し」

とりあえず、１００体ほど作って生産プラントの作成と施設の維持をやらせる。まぁ、錬成した方が早いけど面倒だしね。

「電話だよ、電話だよ」

「ありがとうハロ」

自動人形の統括システムとして、サイコハロを作ったから問題ない。

「もしもし……」

『カナデ、部屋にいないようだが……もうすぐ時間だぞ。何処

にいるのだ？』

しまった、今日は社交界だった。

「お父様、カナデは知り合いを連れて行くので少し遅れます」

『知り合いだと？』

「はい。私の護衛をして頂く契約をしました」

『勝手な事をするなと言いたいが、お前はカガリと違って聡い子だから責任を持つなら好きにして構わん』

「ありがとうございますお父様……」

『うむ、出来る限り早くこい』

「はい」

ふぅ……ハーモニクスを置いて置くんだったね。

「アーニャ、帰るから一緒に行こう！」

「分かった」

アーニャを呼んでから、研究室でハーモニクスを起動させ分身を作る。

「「「ジャンケンポン、アイコデショ！」」」

「勝った！」

全員がゼロを使ってジャンケンを行い、勝者が基地に残るんだ。

「オリジナルが負けた……」

「「「それじゃ、カガリの相手よろしく」」」

「ふんだ……アーニャとイチャイチャするもん」

五歳の時からハーモニクスを使い、研究や開発などを同時進行で行っている。そのため、負けた奴が大変な目に会う。社交界とか面倒なんだよね。

アーニャの手を握って基地から屋敷の近くにボソンジャンプして、部屋に戻った。

「アーニャ、ちょっと待ってて」

「うん」

急いでメイドが来る前にドレスに着替える。アーニャはベットに腰掛けて足をぶらぶらさせているけど、アーニャの格好自体はラウンズの儀礼服だからパーティーに出ても問題無い。

「お嬢様っ！」

「あっ、もう着替えてますよっ！」

「私達の仕事を取らないでください！」

だって、着せ替え人形みたいで嫌だからね。

「その方は？」

「この子はアーニャといって、私の護衛及び話し相手です」

「……よろしく」

「「分かりました」」

多分、話し相手の方を信じたんだね。身長差はまだあるけど、アーニャの方がお姉ちゃんに見える。

「こちらにどうぞ」

私はアーニャの手を握り、魔窟へと赴いた。

パーティー会場は厳重な警備体勢が引かれていた。

「今日は厳重なんですね」

「はい、今日は財閥の方々がいらっしゃっいますし、お嬢様の誕生日ですから」

「確かに今日でしたね」
「マスター、おめでとう」
「ありがとうございますアーニャ。今日で八歳になりました」
そん事を話していると、大きな扉のところに着いたら、大きな声と同時に扉が開いていきました。
「カナデ・ユラ・アスハ様、御入場っ！」
中に入ると、私と後ろに控えているアーニャに注目が集まり、逃げるようにお父様のところへ行きました。

しばらく挨拶などの鬱陶しい事をこなしていた。
「ねぇ、アーニャ。どうせくれるなら、ソキウスのデータや戦艦が欲しいよね」
「ソキウスは分からないけど、戦艦は欲しいね」
まぁ、ボソンジャンプで転送出来るんだけどね。
「何言ってるんだカナデ？」
「お姉様、御機嫌うるわしゅうございます」
「お前、おちょくっ……お父様が呼んでたぞ」

私に手をあげようとした瞬間に発っせられたアーニャの殺気に飲まれたね。

「ありがとうございますお姉様。アーニャ、行きましょう」

「イエス、ユアハイネス」

さて、お姉様を放置してお父様の所に来たんですが……非情に帰りたいです。

「来たかカナデ。こちらにいらっしゃるのはアズラエル財閥の方だ」

「初めまして、美しいお嬢さん。私はムルタ・アズラエルといいます。以後、御見知り起きを……」

なんでブルーコスモスの人がここにいるんですか、殺していいですか？

ちょっと、ＡｎｇｅｌＰｌａｙｅｒ起動させますね。

「……カナデ・ユラ・アスハと申します。アズラエル様」

「はい。そちらのお方は？」

「私の護衛をお願いした愛人……こほん、友人です」

「「……」」

「冗談ですよ？（多分）」

白い目で見られちゃいました。

「まぁ、いい。アズラエル氏はお前を婚約者にしたいそうだ」

「あははは……お父様、冗談が美味いですね」

「本気だ」

「そうです。私は貴女が欲しい！」

「何を馬鹿な事を……ブルーコスモス盟主である貴女がコーディネイターの私をですか？」

バットエンド丸見えじゃないですか、このロリコン！

「何故それを……」

「もう、決まった事だ」

さて、どうする？
ムルタを殺してアズラエルの材料を得る？
錬金術で事足りるし必要無い。なら、利用して捨てるか。サハク姉妹も気になるけど……後回しでいいかな。

「分かりました。ただし、ある程度自由にさせていただきますよ」

「ええ、勿論。これでオーブと我が財団の繁栄は約束されました。これからよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

アズラエルは私を人質とストレス解消、駒にしたいんでしょうが、
私の思い通りに踊って貰いましょう。

「狐と狸の化かし合い？」

狐は九尾でしょうけどね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3078z/

カナデちゃんとヤミちゃんが機動戦士ガンダムＳＥＥＤで暴れるよ〜！

2011年12月11日16時46分発行